

合問題研究所

研究資料第十号

昭和三年一月十日

リウタツノ研究資料其の一

厚生省 合問題研究所

über den Begriff und Dauer der Generationen
世代の概念及び期間について

はしがき

一世紀は、暗く、長く、莊嚴な歴史的尺度である。しかし、それは、ともすれば人間の自然的な感覺を超越した時の人ささとして、現はれることを否定し難い。反之、一世代といふときは、それは、我々にとって、より身近な、直覺可能な時の尺度であるといへる。しかるに、人口理論或は統計論に於て、一世代の眞の意味は何であるか。又一世代といふ、その期間は如何にして決定されるか。それは固定的なものであるか、或いは可変なものであるか。若し、それが後者であるときは、世代が短く、或いは長いといふことは、何を意味するものであるか。

リウメリンは、これらの問題に対し、問題解決の經驗的地盤を提供する詳細なる歴史的記録と、現実社會に対する用意周到なる統計的分拆とを併用して、その學風のはれる、極めて重厚犀利なる世代論を展開してゐる。以下その概要を紹介するが、凡そ引用される統計數字は歴史的な制約をうけてゐるとして御承知願ひ度い。

(一) 世代の概念

世代の概念は、人口理論及び統計學に属するものであるが、それ自体、余り検討されることりなかつたものである。しかし、これを問題とすることによつて、必ずやその弊に報はれるところあることを信する。

先づ、世代といふとき、この用語法が不定であり、誤解の容易い。我々は、この言葉に対し明らかに、様々の意義を附與してゐる。何人が現代の世代 *The present Generation* は、恐らく、氣球によつて、アメリカに旅行することを体験し得ないであらうと語るとき、この世代といふ言葉を以て、現在生存する人類の總体を意味せしめてゐる。しかし、もし私が、三十年戦役は既に、八世代の過去に於ける出来事であるといふときは、現代生存せる人はその祖先の系列に於て、約八階梯上昇しなければ、三十年戦役時代の人に達到することを得ぬことを意味しなければならぬ。ここでは世代は生産 *Progeny* を意味し被生産者 *Engenderer* との間における、年齢差を表現する、時間測定、尺度として使用されてゐるのである。各人は、その父或いはその子に對して一世代、その祖父或は孫に對して二世代を距てゐる。上述第一の如き語義に於ては、常に公明には、只一の世代が生産するのみであるが、第二の如き語義に於ては通常三世代、部分的には四世代或は五世代が公明に相並んで生存する。この概念は、この後の意義に於てのみ、統計的取扱ひ及び解明を許すのである。

世代、概念を対しては、我々は、つとに上古に於て遭遇する。當時は、歴史と確実なる年号との缺如のため、
系圖 *Genealogical Table* の、時の尺度として役立つに。すでにギリシヤ語 *γενεα* に於て、我々の
Generation に於けると、今様は二義に使用、小は、意味あることである。キリストが、彼、復活に就て
「中に、お前は汝らに告げん、これよりして顯はる、よまは人類 *Generations* の中は、七のゆかす」(馬太傳 三、三)
といふとき、彼は *Generations* *of* *men* を以て、彼の今時代人すべてを意味せしめ、
當時生存して、ある人々の中に、彼の予言を体験する人の存するであろうことを説く人としたもりである。
他方又、三世代を稽察したといふ老英雄、ネストールを何人も考へるであらう。ホーマーのイリヤード
一卷、二五〇の一節は、「い、かつて彼と共に今時に成長し、棲息し、リ、二世代は既に凋落し、今や彼は第
三世代を支配する」といふのであるが、この言葉の正しき意味は、恐らく、ネストールが、トロヤ戰に従軍
せしめ、兵士は、彼が、かつて戰場に引具した武士の孫であるといふのであらう。ネストールが、これを爲し
輝かためには、彼は、なにも百歳であること要しな、い、かつて、兵士の平均年令を三十歳と考へれば、
八十歳で足るのがある。未開、闘争時代に於ては、男子及び兵士が無傷強壯で、高齢に達することは
困難であり、今日に於ても、未開人の間には、老人は稀れである。これにせよ、ネストールの兵士達
は、世に彼らは、歳は八十、恐らくは又祖父を有したであらう。しかし、彼等は最早、野戰に従ふ

がこゝが出来ず、國民の積極的構成要素として、最早、數へられることなく、死者と共に、過去を
のちとして、値し、次に過ぎぬのである。

（ロドトス）については、*dynasties* 或いは *dynasties* は、熟知される概念であつたといへる。エドワートの司
祭は彼に三皇名の王の系列を擧示した。彼はこれにより、三世代が百年を形成するところより、一三三四年と
その期間を算出してゐる。又他の箇所には、三三三三を一世代の期間と考へてゐる。然し、この場合、各
一王が一世代を代表すると考へるのは誤れる前提といはねばならぬ。けれど、王朝の交替及び革命を度
外視してもなほ、兄弟が兄弟の、石、叔父が甥の、更には孫が祖父の後を継ぐところからである。ゆが
なり下、王位系列に於ては、通常、父とその子息中、第一に生まれる者との年令の間隔が問題と
なるのである。

さて、このロドトスに於て、なほ幾度も繰り返へる命題、即ち、一世代の期間は百年の上、
或いは、百年であるといふことは、一体何を意味するのかわ、一世代は、現実に一定の時の大きさであるのかわ、
それは一一定不変であるのかわ、或いは可変であるのかわ、若し、後者であるとすれば、世代が短かく、或ひ
は長くとらふは、何に基き、又それによつて何が起るか、而して、この問題に解答を與へるべく、統計には
如何なる手段が與へられてゐるか。

時間尺度としての世代に対する統計的表現は、一つの與へられたる時代に於ける父 Vatern と
子供 *Kindern* との間の平均年齢差 *Kinderschaltliche Altersdifferenz* と
へるであらう。それは故あって、両親 *Eltern* と子供 *Kindern* との間の平均年齢差を問題
とせず、又実目的を合目的性より理由より、父 *Vatern* と子供 *Kindern* との間をとり
ない。母と子供との年齢差は、それ自身この課題であらうが、男子が、指導的且つ支配的種属で
ある以上、これは從属的意義をもつものである。及之、父と母との年齢の平均をとつて、子供
の年齢と比較することは、課題を非常に複雑にし、結局、單なる無價値の擬制の上に立つに至り
しめるであらう。

父と子供との年齢差を見出す、手近な効果的な方法は、直接記録法であらう。即ち、
全人口の調査、或はは少く共、その大部分の調査の機会に、個々の年齢に並んで、その父の
年齢を確かめ、かくて得られた数字より、その平均、即ち平均人の数字を求めんとする。し
かし、實際は、常に間接的方法、即ち、多数或は少数の事例より、推計と、小代用方法によ
つて間に合せなければならぬ。
なほ、すべての問題は、文明人の一天一妻制の風習の地盤から取扱はれる。非常に早熟で、5

一夫多妻制及び奴隸制の存する所々、一人の男が其の生涯のうちに於て、相互に五の歳位迄相誼りするより存せざれば、世代は轉位、錯綜して、最早、追末することが出来ず、今時に又何らの興味をもせずない。

(二) 世代の期間決定の要素

世代の期間が、その要素に依存することは明白である。即ち、一は、甲子が結婚に入ることが早いとか、遅いとかいふこと、他は、婚姻に於ける妊孕期間 *Gestationszeit* 及び *Fruchtbarkeit* が短いとか、長いかといふことである。而して、この要素は、早期結婚に於て、妊孕期間が長いとか蓋然性が証せられる限りに於て、相互に協働し合はりである。父と子供との年齢差は、第一子に於てもなく、末子に於てもなく、それは、一俣り平均年齢に於て計算するべきである。その爲り、詳細なる資料が不足してゐるときは、長子と末子との折半差 *halbe Differenz* をとるべきである。かくて、一世代の期間に於ける、統計的表現、若しくは、統計的差價物 *statistische Äquivalent* は、男子の平均結婚年齢に、婚姻に於ける、平均結婚妊孕力、中間継続期間を加へたものである。

(4) 男子の平均結婚年齢

キリスト教的、ヨーロッパ文明の支配する領域に於ては、結婚に於ける風習に關し、諸民族間の差異を確証する如き、如何なる事實も存しない。結婚の頻度並に、その早期性は、意志に依存するのではなく、能力に依存する。長生理的條件、即ち、思春期の開始に關して、南北温帯の諸国の間に、若干の差異が存するのみである。決定的要素は、経済的條件の中にある。家庭を建設し、家族を扶養することの容易なる処に於ては、早期に結婚され、それが困難なる所に於ておくれる。前者に於ては、少數の男子が未婚のままであり、後者に於ては多數が未婚である。豊饒なる土地が、至ほ過剰に残存し、労働は需要され、よく賃銀を得られ、生計がたやすく樹えられる所は、最も順調なる條件の存する所である。ロシア、合衆国の農業地帯、カナダ、オーストラリアの如き、それである。これらの地域に於ては、大多數の男子は、早く、二十歳の前半期に結婚する。この正反対を形成する地域は、法律的に、事實的に、居住の自由が制限される所であり、農業或は工業に於て、空席のまばれる所、就中、主として農業に於ける封建經濟關係が残存せる地域、即ち、一人の息子が、父の死亡或は隠退をまばねばならず、その他の子供は、結婚の條件を前以て労働によつて確保するを要するが如き所である。Wirthtemberg の Gersheimbach に於ては、7

農村の、る地域に於て、三五歳の男子中、或は、その過半数は未婚である。今様の関係にあるものは、8

Alt-Egypten, Mesopotamien, Westphalen, Hannover 等である。この地域に於

ては、結婚の平均年齢は、三〇歳代の中程迄延ばされてゐる。

この約一〇歳相距する、西限界の間を、数多の段階に分けて、大部分のヨーロッパ民族の平均結婚年齢が動してゐるが、そこでは完全に占有され、地と、稠密な人口が存し、只移動の自由の下に、若い人が、自己の家庭生活を建設するまで、何らかの短き或は長き準備期間が課せられてゐるのである。英國に於ては、男子の平均結婚年齢は二八歳とされて居り、佛国は三〇歳、ベルギーは三三歳、独逸に於ても全体的には、三三歳といふ数字が認められてゐる。ノルウェーに就ては、三三、三八歳といふ数字があり、オランダは三二、三三歳、かくて全体として、中部ヨーロッパの男子の平均結婚年齢は三三歳とされてゐる。

しかし、世代は單に、父と長子との年齢差によつて、父とすべからず、孫との間の年齢差によつて、決定されるを以て、更にすすめて、最年長と最幼少との兄弟姉妹の間に於ける、平均年齢差、或は今じこゝとあるが、婚姻に於ける、妊孕力の平均継続期間を決定すべきことが問題となる。

(四) 婚姻に於ける妊孕力継続期間

婚姻に於ける妊孕力継続期間決定の問題は、世代の長さを見出すといふ課題を別にしても、それ自身興味あるものがある。少くも其相當数の事例に、確かな據と表を導き出すはならない。

これに關し、ユルテンベルグの戸籍表は、必要なる記入を十分含んでゐるが、チュービンゲンが戸籍表申すより、無子婚姻及び、子供の出生が終熄したと見られる婚姻

も除外して、五つの婚姻をとりあげた。婚姻に於ける妊孕力を、結婚と最終

終熄の出生との間に横はる期間に従つて算出し、みると、五つの婚姻につき、六二七年度の妊孕期間となる。なほ詳細にいへば、妊孕力の継続期間は、

壹例 〓 調査せる婚姻の 一四・八% は 一十五年

一二九例 〓 〓 〓 二五・三% は 一十五年

一三六例 〓 〓 〓 二七・二% は 一十五年

一三二例 〓 〓 〓 三二・三% は 一十五年

四〇例 〓 〓 〓 八% は 一十五年

となつてゐる。この五回の婚姻に於て、三男八児が出生した。故に婚孕可能な一婚姻に於て、六男の割合である。無子の婚姻は全体の1/4、或は1/5である。

キエーピングの人口は、大部分葡萄酒栽培者と、小手工業者より構成されて居り、法外の幼児死亡率と、非常に多子の婚姻とが通則を呈してゐる。一男一三男を有し、その2/3は出生直もなく死亡する。

とソックとは、しほくである。又例へば、一婚姻に於て一男が出生し、その中一人が成長し、他の第二男は五歳迄、他の二人は最初の第一年前も、殆んど第一月及び第一週に死亡してゐる。二回結婚した一人男子は、一男を有し、その長子と未子とは、四歳年令が相距つてゐる例も存する。

全様の原則のもとに、更にゴータの統計表を精査して、二六回の婚姻を取出し、その妊孕力継続期間が、全体に於て三三の六年となつてきた。従つて各一婚姻につき、一三、五年であり、これは上速の数字と少し距るに過ぎない。而して、その中

三三例	即ち	西%は	妊孕期間	一五年
六六例		二五%		六一年
九三例		三四九%		三一年

五五例 即ち

一四例

二〇八例は 妊孕期間一木子年

五三例は

二一三五

とをうまゐる。

児童数は單に生存せるものヲ計上してあるから、比較し得ないが、上記オーストリアにいはれ
たるよりも少いことは疑ふ余地はない。

何故に妊孕力の繼續期間が少し長かるといふは、その原因は恐らく此處に觀察された。 社會階級に於ては、男子が結婚に入る

場合、一般に、経済的及びその他條件の成立を待つといふことは、それ程容易なことでないの
で、むしろ廣習的に遅く結婚することと常としてあるからである。

右の二、非常に異なる生活層の調査結果が、符合するといふことは價値あり、且興味あることで

ある。而して、一三といふ数字が、少く共、一般平均に近似的であるといふことは、確からしいので

ある。男子が独逸或いはフランスより、二一三年早く結婚し、多数が子室の支配する英國に於て

は、婚姻に於ける妊孕力の平均繼續期間は、二一二年に高まるであらう。平均一婚姻に三見以上を

出さるる佛國に於ては、二一八年の平均より、此の数字が二四より高く、或いは二一八年

り低くなるといふことは、何處に於ても困難なることである。

(三) 世代り期間

かくて、一世代の期間を決定するに、兩要素が検討せられた。しかし、上述の方式、即ち、男子の平均結婚年令 \bar{X}_m 、平均結婚妊孕期間の折半といふことは、やはり小さな修正を必要とする。

婚姻に於ける、妊孕力の繼續期間を決定する為には、實際の見地よりソレは、結婚年令、未子の

の出産に至る期間を測定するより他に恐らく仕方なかつたであらう。しかし、本来問題となつ

てゐるのは、その婚姻に於ける長子と未子との年令差なのである。通常、長子の出生は、結婚第一

年の終末に當る。若し、婚姻妊孕力が三年の期間を抱括してゐるならば、長子と未子との年令差

は、平均たゞ一年を數小にするにすぎない。かくて、この一年、結婚第一年を、なほ結婚年令に附加

しなければならぬ。而して、兄弟姉妹の年令差を見出すといふ、當面の目的の爲には、これ

を、婚姻妊孕力の繼續期間から差引かねばならぬ。

かくて、求められたものは、 $\bar{X}_m + \frac{1}{2} \bar{X}_f - \bar{X}_m = \frac{1}{2} \bar{X}_f$ 、或いは、 $\bar{X}_m + \frac{1}{2} \bar{X}_f - \bar{X}_m$ 、英國に於

ては、 $\bar{X}_m = 28.1 + \frac{1}{2} \bar{X}_f = 35.1$ 、フランスに於ては、 $\bar{X}_m + \frac{1}{2} \bar{X}_f = 34.4$ となる。早婚多子國、

例へば、合衆国、ロシア、オーストラリアに於ては、此り数は約、1871-1911 となる。

定住困難にして、不可分の土地貯蔵のもとに、少数現を有する地域に於ては、此の数字は、

34,100,000 となる。かくて、一世代の継続期間は、一夫妻制り、温帯諸民族の間には、

その平均、三年の限界を降ること多く、且つ三九年を越すこと少くは疑なきところである。中部

ヨーロッパ諸國に於ては、三三-三八年と認定すべきである。

(四) 若干の史的記録

ヘロドトスは、彼が所謂「133年を以て、その當時のその土地の狀態、自由人と南方氣候に對し、

甚だ正確な認識を有してゐたのである。此の教は現今の代々として、二ト三年低い。思ふに彼は、

かかる尺度を、系譜に精通し、且つ通常、曾祖父と曾孫との出生の間には約百年が横はり、従つて一世

紀は三世代を包括すると、経験的認識も有してゐた、エナケトの司祭より受継いだものと思はれる。

しかし、一はく、云はれる如く、もし、一世紀の間は、三世代が出生し、死亡すると考へるならば、それは

この概念に對し、誤れる解釈を與へるものといはねばならない。むしろ通常の場合、父の出生より

子息の死亡迄の期間が既に百年を越すのである。例へば、子息が七歳に達し、且つ子息の出生時

父が七歳を有したとすれば、その残り生存の長短を問はず既にさうである。

上述の補完の爲に、左ほ若干の史的記録が役立つであらう。

ビクトリア女皇は、女皇ナリハの六年前に出生せる *Wilhelm von Hohenzollern* の直系五代目である。従つて、一世代の長は三三二年である。しかし、英皇統治の君主の数は三四を数へ、平均治世三三七年である。今様に *Wilhelm von Hohenzollern* と今時代の人々ナリ、女皇の他の一人の祖父たる *Pygme von Este* 即ち *Welf-Estsch* 家の祖老ナリ、*Heinrich Henne* の宋祖父たる人ト置るは、二五世紀である。

Charlombard 伯（一八三〇年出生）は、フランス五朝の祖老たる *Anges Capet* 伯（九七九年死）の出生は凡そ九三〇年と用ひ出ると二七世代距つてゐるが、他方三四人ナリ王ガフランスを統治してゐる。従つて一世代平均三三年、一ホの治世三九年である。

- Fransy Troopke* 伯 *Rudolf von Hohenberg* 伯（一八三〇年）一各世代三三〇年である。カイゼルウナルハル公ナリ、伯爵 *Friedrich von Hohenzollern* 伯（一八三〇年）一各世代三三年。
- Bavaria* の *König Maximilian* *Wittelsbach* の *Otto* 伯（一八三〇年）一各世代三三年。
- Westphalen* の *König Maximilian* 王家創始者 *Wendel* 伯（一八三〇年）一各世代三四年である。
- Sachsen* の *Albrecht* 王（一八三〇年）一創始者 *Heinrich* *Albrecht* 伯（一八三〇年）一各世代三四年である。

代、各世代念じく三三年の割合で距つてゐる。シハエル・ロマノフよりアレキサンダー二世に至る同一世代、各世代は、³¹1/2年である。これは、久逝したアナトロボフ、女性中継者として念じくするに於てある。アレキサンダーより *Alexander* の租考 *Chimanz* (治世一〇八年—一四三年) 迄三世代、各世代三三年。これより知識は、エノア及び *Welfen* の系譜圖史より採つたのであらうが、なほ容易に多数の全様を類例と見出すことが出来る。

これらも事實は、その自身としてわかりなからず、又上の記述と調和する。けれど、父と子との子供とではなく、長子との年令差のかが問題となる君主の系系に於ては、一般民衆の平均に於けるより、その間隔が三三年低くなることは自然である。又は、皇太子及び皇位継承者は、早く結婚する事が常則であるので、こゝり貞より女でも、この数字はやはり低いはずである。又 *Welfen* に於て、王位継承の飛躍が若い系統によつてせられることかつかつたことか、こゝに於ける世代継続期間が若い数字をとつたことより原因がある。反之、英国の皇位系列の如く、度々女系の介入すること、は、その若く結婚年令によつて、世代期間の短縮をきたしめてゐるものである。

他方、市民家族の系圖を檢討してみるときは、例へば *Welfen* の一家創設に関する *Faber*

の勞作をせざる時は、一見諸事情の非常に多様性を見出すが、向もなく次の主要の結論に到達する。
即ち、單に長子の系列を遡ぼるならば、世代は三〇—三三年であり、未子の列をれば、世代は約四十年を
算し、平均は三五—三六年の向を動いてゐることを知るのである。女性の系列に於ては、世代は多くの喪
失を伴つてはゐるが、約三—四年短りである。又次の如く注意が與へられる。即ち、本世紀の初頭より、
遡れば、中産階級の男子は現在より早期に結婚したるであり、その平均結婚年令は、前世紀に於て、
二五年以上であつたことは殆んど稀れであつたであり、*Winstanley* によつては、爾來約五—六
年高くなつたとみられるのである。

(五) 結語

さて、最後に、この研究は如何なる意義を有するか、一般に、世代の概念と期間とを明らかにす
ることは如何なる價值を有するか、此の期間が短いか、長かといふことによつて、何が意味され、
それによつて何が推知されるか。

世代の概念は、人口統計論に特有なものであり、諸國民の社會状態を性格づけ、且つ相互に
比較するべく形式と手段たるものである。

着く、努力的な、その人口数も急速に増へしつゝある民族は、短い世代を有する。その代は、
青年

は早期に自己の収入能力に到達し、一家建設の基礎を獲得する。他方、彼等の父自身、今は壯年に達してゐる。両親の遺産は遂に彼方に尽り、各自は自己の労働と能力に依る。若くは早く、国家及び自治会、経済界及び精神界に於て、強力を且多量の勢力を獲得する。彼等の見解は、あらゆる方面に於て重く重なりあつてある。而して、この世の傾向は、南に在る諸民族も植民地、ギリシヤ人、或はローマ人、或はイスラエル人、スペイン人の植民地、特に共和政体、國家組織に於て最も自由なる活動領域を見出すのである。植民地は常に母國より、匆忙過ぎる利益を呈するのである。

反之、殆んど全利の土地を失つたところ、今日の状態窮屈にして、且、一層の複雑なる窮乏を呈する所ある古き、或は熟せる民族に於ては、一争嘩を予備する。男子は長期の予備教育と、隷属の後、漸く経済的強之を得る。自己も、或は建設する。政治的、経済的及び精神生活に於ける發展の速さは、近年階級を穿つて、その中の進歩は、非常に困難である。多くの闘争のもとに行はれ、社会的改革は、緩慢たるものである。而して、この世の傾向は、南に在る諸民族も植民地、ギリシヤ人、或はローマ人、或はイスラエル人、スペイン人の植民地、特に共和政体、國家組織に於て最も自由なる活動領域を見出すのである。植民地は常に母國より、匆忙過ぎる利益を呈するのである。

勢力を獲得し、決定的地位に到達し得るといふこと、即ち、世代が相互に連に離れておるといふこと、密接に關係する。よくある。

世代期間の、高く八百三年度の差は、六の七の影響を保持にたどりつくとをへるであらうが、實際は深き
差異を形成するに足らぬである。同知のバイナルの言葉に従つて、人間の壽命が七十年續くとして、父
と子との年令差が、平均三五―三八年を算するとすれば、二の七完全なる世代が相並んで生存する
ことは不可能である。しかし若し、子が父に、その年令に於て二八―三〇年おくれをみるならば、その
年といふ生命の限界は、その世代は容れられぬのである。然るとせば、異なる年令階級の様々な精神的
接觸と摩擦とが起るは、青年期の後期まで、祖父母の幸福が比較的多く味はれるのである。他の
場合に於ては、通常、たゞ最初の児童に於てのみ、この幸福が少し味はれるに過ぎない。後來の人間に対し、
死をせる人々に關する知識が、直接にその觀念と、知識とに入るといふことは、意義深きこと、いはばならぬ。
固定と不變の諸力の最も盛んなは、婚嫁に、長婚嫁にその期間が附随し、世代が最も遠く距りたる
封建的農業經濟地域に於て、あるといへる。

現代人から、ミエタスピア及びエリザベス女皇時代の人に至る迄、約幾世代かといふ間に對しては、
これを問ふ人が、子供か、老人か、或は中年の人であるかに應ずる。答へが異りねばならぬといふ
ことは云ふ迄もない。しかし、我々は、必然に確固とした出發点を求め、青年を未來の、老人を過
去の世代とし、中年の中に、この足場を見出すのである。シヨッパルは、その旨ある表現によつて、

人間の年令を遊星の順位と各種に比して、主神たるジエロデルとして、吾輩代の人を擬してある。けれど、彼らは、その時代は於ける国家と社会と藝術と科学とに於ける支配者であるからである。指導的、決定的なる子令階級が、夫々の時代の代表者である。かくて、フランス革命の時代を、我々の祖父の時代といふ。例へば、老人にとっては、その父の時代であり、青年にとってはその曾祖父の時代であらうとも。

一世紀は、暗く莊嚴な、人間の自然的感覺を超越した時りである。しかし、世代、即ち、父と子供との年令の差は、我々とは覺悟的にして、理解可能なる時の尺度である。若し、子供から父の、よく知らぬものなる道程、振り返るべき如く、一世紀を一家とするならば、世界史は我々

に人間的により近く歩かえり、相互に接近せしめらるであらう。西親と子供との觀念と思想との差異は、比較的小さな、むしろ、今二原色等の眩度の濃淡の差として現はれる。それ故、*Friedrich* といふ *Balthuse*、*Kilopastock* と *Keising* に到達せしむるには、単に此の

差異を三倍して、大量現象に凝縮すればよく、又他の全く異なる、ヨーロッパの国家体制等は、*Giustav* *Moysak*、*Comanwell*、*Fuchs* *Siem* 及び人選候補等の表氷界に到達

世人が爲には、単に二倍すれば足ることを知れば、駭愕かゝるを御ないであらう。我々の祖先より

三の番目の著者は、

彼の家畜を、中火を、

人類の生活を、週期的

大量現象に昇華されるの

の神念に、馬を屠殺して供へ、第六の番目の著者は、

救済し、大で知らう。悪力を変革と、心的爆発が

は、父と子との悪習と観念とに於ける小の差異が、

その内容と序列とを、我々は人類の文化史と呼ぶのである。

林 暎託